

『花ひらり恋ふわり ～天使がくれた恋のお話～』

著：弓月あや

ill：明神 翼

「未来ちゃんっ！ そんなところに上っちゃダメッ！」

「だってえ」

「そんなかわいい顔をしてても、ダメなものはダメッ！」

湊が叫んでいるのは、海棠宅のロフトだ。大声で怒られているのは、未来ちゃん三歳。どこに上っているかと言えば、二階に設置されたロフト。

この天使は非常にアクティブで、少しもじっとしていない。ようするに、悪ガキの要素がたっぷりなのだ。

（見た目のかわいさに、思いっきり騙された……っ）

どうやら保育施設では、思いきり猫を被っていたらしい。

そういえばスーパーで見かける幼児のお母さんたちは、みんな疲れを乗り越えた顔をしている。その理由は、最愛の天使ちゃんだ。

湊はロフトに続く階段を上って、身を乗り出してバタバタ遊んでいる悪魔を驚掴みにする。ロフトの高さは結構なものだ。落ちたらタダではすまない。

そんな思いを知ることもない悪魔は、「あーん」とジタバタだ。

「みっく、ロフトがいいー」

「ダメに決まっているでしょう。未来ちゃんに何かあったら、パパが泣いちゃうよ！」

ぐずっていたのに、『パパ』が効いたのか、キョトンとした顔をされる。

「……ぱぱ、ないちゃう、の？」

「うん。泣いちゃう。ぼくも泣くよ」

「どうちて湊ちゃん、ないちゃう、の？」

「だってぼく、未来ちゃんのこと、大好きだもん」

「だいしゅき？」

「うん。大好き。だから未来ちゃんを危ない目に遭わせたくないし、痛い思いなんか絶対にさせたくない。だって未来ちゃんが大切だから。ぼくの言うこと、わかる？」

そう言うと、ちっちゃ子なりに思うところがあったらしい。湊の首にしがみついて、子供にしか出せない声で、小さく囁く。

「ごめんなさい」

しょんぼりとした顔をされて、湊はドキッとしてしまった。

「あのね、みっくのこと、きらいにならないで」

その声を聞いて、胸がキュウっとなる。

(うわー、かわいい！)

湊は子供好きだが、ここまで気持ちが揺らいだことはない。それぐらいかわいい。

「キレイになんか、ならないよ。でも、ロフトには絶対に上っちゃダメ。ぼくと約束して。ロフトには、もう上らない。いいね？」

そう言うと、未来はコクンと頷いた。その瞬間、悪魔から天使に格上げだ。

(我ながら単純だけど、まあ、いいや)

未来の愛らしさに、どんどん甘くなっている自分を反省しながら、首にしがみついて離れない子を、優しく抱きしめた。

湊の日常のルーティンは、朝は普通に学校に行く。下校したら、そのまま父の病院へ。まだ意識が戻らない智彦の様子を見てから、保育園へお迎えだ。

夜の保育施設は、湊がシッターとして勤め始めてから、お休みにしている。ゆくゆくは、保育施設は退園して、昼の保育園は続けて、夜は家で湊と過ごすことになる。

海棠がちゃんと湊を保育士に紹介して、書類も提出してくれているので、お迎えは至ってスムーズだ。以前ほかの保育園で連れ去り事件があって、人の出入りには厳しくなっているらしい。物騒な世の中だから、この安全管理も当然だろう。

「未来ちゃん、お迎えが来ましたよー」

「はい！」

空色の保育着を着た未来が、嬉しそうに笑った。こうやって見ると、本当に天使だ。

手を繋いで保育園を出ると、まっすぐ海棠家へ向かう。小麦アレルギーの未来は、いっさいの買い食いは禁止。寄り道もしない。

「早くおうちに帰って、おやつだね」

「うん！ きょーおーのおやつ、なーにかなあー」

変な節回しで歌う未来と一緒に歩くのが、なんだか楽しい。一緒になって歌っていると、通行人の主婦らしき女性に笑われた。

そんなことをしながら帰宅し、ウガイと手洗い。

海棠が契約しているキッチンデリから配達される、アレルギーに配慮した食事とおやつ。今どきって本当に便利だと感心する。

今日のメニューは、おやつが豆乳クリーム米粉パン。夕食が米粉パスタの豆乳グラタン。明日の朝食用に、米粉パンで作ったサンドイッチ。

海棠と湊の分も一緒に注文してあるから、未来が疎外感を覚えることもない。

米粉パンはトースターで、ちょっと焼くといいらしい。説明書を見ながら、書かれた手順通りにやってみる。

「はい、お待たせしました」

外側はカリッ、中もっちりパンのでき上がり。未来も嬉しそうに、パクッとひとくち食べて足をジタバタさせる。

「おいちいー」

「本当？ ぼくも食べてみよう。いただきまーす。……本当だ。うわー、おいしい」

ちょっと温めただけなのに、劇的においしい。すごい発見をした気持ちだ。

湊は手早くパンを食べると、アレルギーのテキストを開く。簡単なものだが、図解やフローチャートを使っていて、すごく見やすい。

(もっとアレルギーの勉強をして、未来ちゃんが食べられるものを増やすんだ)

湊が使命感を燃やし拳を握ったその時。玄関のドアが開く音がして、「ただいまー」と聞き覚えのある声がした。

「ぱぱだ！」

未来が喜びの声を上げたのと、リビングのドアが開くのは同時だ。

「海棠さん、おかえりなさい」

「ただいま。近くまで車で通ったから、様子を見にきました。湊さん、不自由はないですか？ 足りない物とかがあれば、買ってきますよ」

「ありがとうございます。でも、特に不自由はありません。あ、海棠さんもおやつ食べませんか。豆乳クリーム米粉パンです」

「いつも買うパンなのに、湊さんが言うとおいしそうだ。ひとつ、いただこうかな」

「はい。ちょっと待ってくださいね」

パンを温めている間にお茶を淹れてトレイにのせると、ソファに座っている海棠の前へと持っていく。未来は思いがけず早く帰ってきたパパにベッタリだ。

「失礼します」

そう言ってからカップをテーブルに置いた。彼は「ありがとう」と言って、出されたカップを手にする。その時、海棠がテーブルに出しっぱなしになっていた本に触れた。

「湊さん、これは？」

「あ、出しっぱなしにして、すみません。これはアレルギーに関する本です。何も知らないままじゃ、未来ちゃんのシッター失格だと思って。それより、パンどうぞ」

海棠は何か言いたげに湊を見つめている。

「湊さんに、こんな雑用までさせてしまって、すみません」

「いいえ。このパン、温めて食べたら、すごくおいしかったんです。だから、海棠さんにも食べてもらいたいなと思って。ね、未来ちゃん」

「ねー」

未来と一緒に、「ねー」とやると、見ていた海棠はプツと笑い出す。

「心配するどころか、二人の仲は最高じゃないですか。そんなことをされると、可憐でかわいくて困ります」

可憐で、かわいい。聞き慣れない単語に湊は首を傾げたが、聞き間違いだ。

「ぱぱ、はやくパンたべてえ」

「はいはい。……うん。本当だ。いつものパンじゃないみたいだ」

ちょっとしたことなのに、この大絶賛。恥ずかしくなって、思わず照れ笑い。

都内に豪奢な一軒家を持っていて、ホテルのオーナー。もっとおいしいものを口にする機会は多いだろう。

それでも子供と同じ食事をして、湊の薦める食べ方を褒めてくれる人。

ものすごく優しいのだ。

(でも、褒めてくれるのは嬉しいけど照れるよね)

「湊さんは真面目だし気が利くし、ずっとこのまま働いてほしいぐらいですが、お父さんが赦さないのでしょね。……そういえば、今日も病院に寄ったんですか」

父親のことを訊かれて「はい」と返事をする。

「学校が終わって直行しましたが、変化なしです。血圧も脈拍も変わらずでした」

今日も病院へ行ってきた。もしかしたら意識が回復したんじゃないか、いや、もしかしたら集中治療室を出られたんじゃないか。そんな一縷の希望を抱いて。

でも機械に囲まれて寝ていたのは、いつもと同じ姿の父。

手術は成功したはずなのに。智彦は目覚めない。

医療用リストバンドをつけ入院着を着ていると、父ではない別の誰かが、父のフリをして眠っているみたいだ。

(なんか、……お父さんっぽくないんだよね)

不精髭が伸びて、髪がボサボサなのが普段の姿を表している。

でも、それだけ。

肌がガサガサになっているなあとか、爪が驚くほど早く伸びているなあとか、髭剃りしてあげたいなあとか。どうでもいいことばかり気にかかる。

普段だってピシッとしてなかったし、髭だって伸びているのも珍しいことじゃない、もっとだらしない時だって、よくあったのに。

でも何かが違う。

集中治療室に入室するために、見舞いの人間は着替えとか消毒とか、いろいろしなくちゃいけない。お父さんに会うだけなのに。お父さんに触れたいだけなのに。

消毒用のアルコールの匂いのキツさで、これが現実だと思い知る。倒れてから何日も経っているのに、まだ現実を直視できない。

いつも元気なお父さん、いきなり倒れて大手術。だけど目覚めることはなく、ベッドの中にずっといる。妙に語呂がよくて、ちょっとおかしい。

ぼくは、見守ることしかできなくて。

お父さんが二度と目覚めなかったら。

頭に浮かんで消える悪夢。最近よく見る夢は、いつも最悪のことばかり。

『お父さんの意識が戻らなければ、このまま寝たきりになるかもしれません。目覚めたとしても、なにかしらの重い後遺症が残る可能性もあります』

そんなことを医師に言われたのは、数日前。ものすごく重大なことを言われているのに、言葉は頭の中をすり抜けてしまいそうだった。

いきなりの宣告は、湊を地獄へ叩き落とす。

だって、手術は成功したのに。成功したって言った。言ったのに。

お父さんが、寝たきり。

最悪のことを言われて、気持ちが石コロみたいにガラガラ崩れ落ちる。お父さんが寝たきりになったら。何もわからなくなったら。

———お母さんみたいに死んでしまったら。

頭の中で、ぶうんと虫が飛ぶ。蝉。あの時の蝉。母が亡くなった時に、頭の中を飛び回った忌々しい虫。そいつが高笑いするみたいに、大きく旋回しながら鳴いてる。

湊は何度も瞬きをして、その幻影を追い払った。

お父さんと話がしたい。

せめて、せめてもう一度だけでいいから、二人で笑いたい。

起きてほしい。死なないでほしい。『ゆうべ呑みすぎちまってさあ』って、くだらないことを言ってほしい。どんなことでもいい。声が聞きたい。

でも、お父さんは起きない。奇跡は起きない。蝉は鳴いている。勝ち誇ったみたいに大きな声で鳴いている、忌々しい蝉。大嫌い。だいきらい。

お父さん死なないで。お願い。ひとりにしないで。お願い。お願い。

そんな考えばかりが、頭の中に浮かんでは消える。

「……あれ？」

すうっと何かが頬を流れたので、指で触れてみる。これはなんだろう。

こうやって思いつめたりするから、とつぜん心がポキンと折れる。

折れた心は、治らない。開いた心の隙間から、何かがあふれ出している。透明な液体は、水だろうか。いや、ちがう。———涙だ。

涙は頬をすべり、パタパタと服に零れ、いくつも染みを作っていく。慌てて右手で口元を覆った。涙を流している恥ずかしさよりも、嗚咽が出そうなほうが恥ずかしい。

泣いちゃダメだ。泣いたら迷惑だ。泣いたら恥ずかしい。泣いたら、みっともない。

「湊さん」

心配そうな声が聞こえたけれど、取りつくろうことができない。

どうして自分は泣いているのか。父が意識不明なのは、今に始まったことじゃない。今は嘆く時じゃない。しっかりしなくちゃ。頑張らなくちゃ。

でも。

でも涙が止まらなかった。

泣きたくて泣いている涙じゃない。恥ずかしい。みっともない。悔しい。何もできない自分が悔しい。悔しい。

母を失った時の衝撃と同じ。

心の奥に大きく開いた傷も流れる血も、すべてが同じ。

あふれる涙を抑さえられず、何度も手の甲で拭った。すると海棠がその手を、そっと押さえる。顔を上げると、真摯な眼差しに見つめられていた。

「湊さん。泣いていいんですよ」

穏やかな声に気づいたら、海棠の腕に抱きしめられる。

離れようとしたけど、彼は力強かった。とても優しく、それでいて強引だ。

いつもは常に湊の意思を尊重してくれる海棠なのに、今は、とても強硬だ。だけど、弱っている湊にとって、この強さは心地いいものだった。

「急に、ごめんなさい。もう大丈夫だから」

そう言って身体を離そうとしたけれど、海棠の力は弛まなかった。

「湊さんは苦しい。だから涙がこぼれる。当然です」

「海棠さ……」

「ずっと泣けなかったんでしょう？ 今、ようやく疲れたなあって心が言えたんです。だから、思いきり泣いていいんですよ」

そう言われたとたん湊は彼にしがみつき、ふたたび涙を零す。すると大きな掌が、背中を何度も撫でてくれた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>